

佐賀新聞 2009(平成21)年11月30日(土) 武藤辰平展企画

寄稿

## フランスの風を故郷に 武藤辰平の画業と作品

つの問いの答えを生涯かけて探し続けた画家であったのだと、あらためて実感している。

武藤辰平の画歴は、大きく三つに分けることができる。まずは大正初〜昭和5年までの初期、次に昭和6〜9年のフランス留学期、そして帰国後の昭和10年から晩年までの後期である。先の「色彩の画家」「虹(あるいは光彩)の画家」としての色彩は3年以上におよんだフランス、パリ留学期に養われたのだった。

パリでの修学は武藤作品の色彩を一変させる。その最大の契機となったのはミレー、ルドン、セザンヌ等、かの地の名画の模写であった。「……………今までの強い色の暗い絵が明るい美しい色になり、ルーブル美術館で何枚も何枚も模写して、自分の色を見つけるまで苦んだ」(弟武藤久平氏の談話)というように、武藤は模写という学びあるいはまねびーをとおして、ヨーロッパ絵画の色彩(それはヨーロッパの陽光、空、大気の明るさでもある)を、いかにわがものとし、作品に取り入れてゆくかを懸命に模索した。

特に、ジャン＝フランソワ・ミレーの「春(現在はオ

ルセー美術館所蔵)の模写体験は、武藤にとって画技の鍛錬以上に、かれに虹という新たな画題を授け、光彩への関心をうながしたという点で、特に重要な意味を持つものとなった。「春」の模写を着手した後に描かれたであろう「虹」(1933年)は、武藤の留学期の集大成であり、かれの画業を代表する名品のひとつである。

武藤は戦後の1947(昭和22)年11月、フランスでの模写を中心にした「泰西名画模写展(主催佐賀美術協会)を佐賀市公会堂にて開催している。それは、ここ佐賀に洋画の「本場」ヨーロッパの空気を伝えるとともに、いまだ戦後の混乱残る中、世界と、郷土の美術文化の健在を力強く訴えたことだろう。

武藤辰平の作品と生涯をたどる時、私たちはそこに、ヨーロッパの色彩と光、そして、かの地の歴史と文化への限らない「憧れを感じることができると。郷土に暮らし、洋画家としての生を全うした武藤の澄んだ目は、今も私たちの心を潤し続けている。(県立美術館学芸員・野中耕介)

現在、私たちは洋画家・武藤辰平のことを、そのやわらかく瑞々しい色彩感覚を称えて「色彩の画家」、あるいは、かれの滞欧作に描かれた印象的なモチーフである「虹」のイメージから「虹の画家」と呼ぶ。今回の展覧会「武藤辰平―フランスの風―」では美術学校の卒業制作「自画像」(1920年、県内初公開)をはじめ、武藤辰平の画業の初期から晩年までの作品計60点を展示しているが、今、それらを眺めながら、武藤辰平は「色彩と光(光彩)をいかに表現しようか」というただひと